

## [015]九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレ ター

<https://doi.org/10.15017/4403325>

---

出版情報 : 九州大学附属図書館付設記録資料館ニューズレター. 15, pp.1-, 2021-03. Manuscript  
Library, Kyushu University Library

バージョン :

権利関係 :

## NEWSLETTER

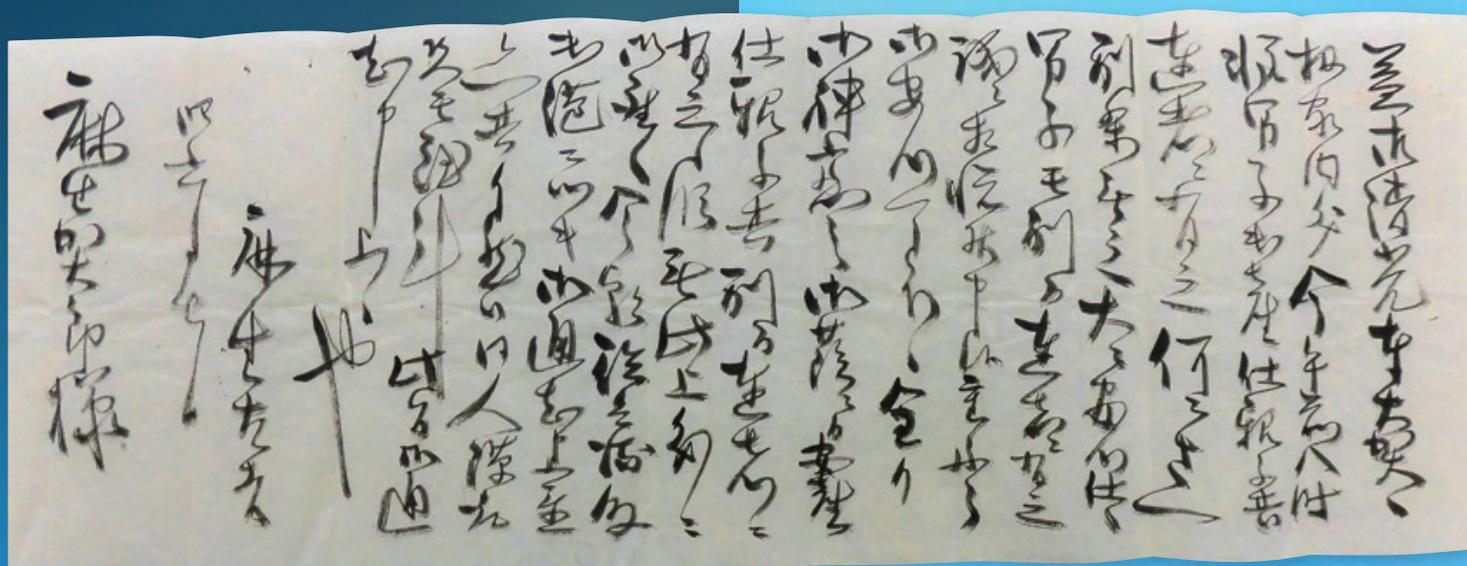
九州大学附属図書館付設記録資料館 ニューズレター

ISSN1881-879X

2021 VOL. 15

## CONTENTS

●特集	1
麻生家文書研究部門の設置	
●資料研究	5
北海道炭礦汽船株式会社関係資料の受入	
●資料紹介	7
古野家文書の来歴と『古野家寄贈図書目録』	
●トピック	9
北炭資料の搬出入と各種対応	
●刊行物紹介	10
産業経済資料部門	
九州文化史資料部門	
●令和2年活動記録	11
●編集後記	11



## 1882年旧6月7日(7月21日)付麻生賀郎宛麻生太吉書簡

長男・太右衛門の誕生を父・賀郎に知らせる太吉の書簡です。「親子共達者二有之、何二さへ別条無之大ニ安心仕候、男子モ別而達者二有之」、「全ク御神慮之御蔭ニ而安産仕、親子共別而達者二有之候段、無此上義ニ御座候」と母子ともに健康であることを繰り返し書き綴っており、太吉の喜びと安堵、そして興奮が文面から伝わってきます。

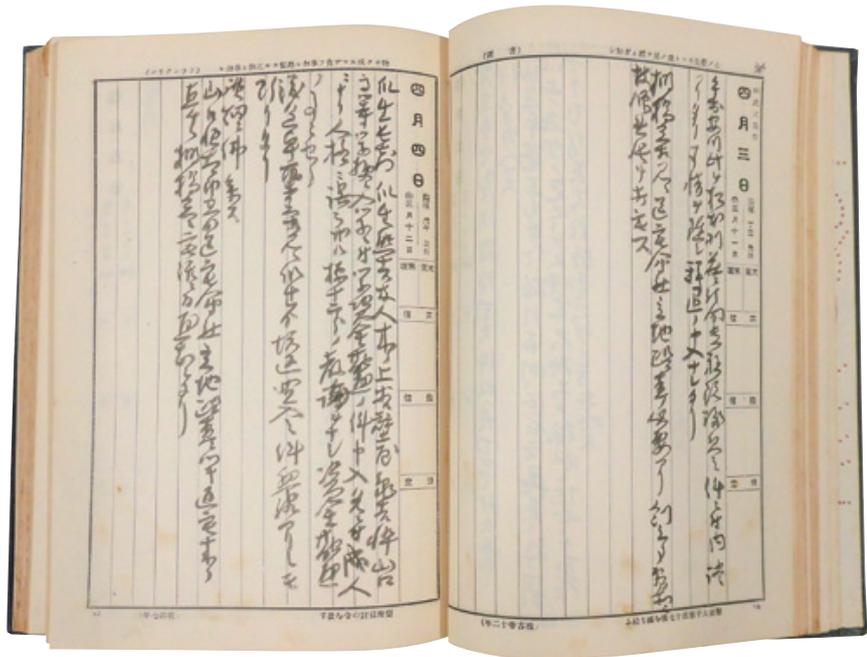


# 特集

# 麻生家文書研究部門の誕生とその活動

## 麻生家文書研究部門の設置

記録資料館産業経済資料部門の主な収蔵資料に、福岡藩の庄屋で、筑豊御三家の一つとして石炭産業を牽引した麻生家と、同家が経営した関連会社に由来する膨大な史料群「麻生家文書」があります。年代は幕末から戦後(昭和30年代頃)にわたり、その分量は大型文書箱に1500箱以上、史料数は数万点に及びます。この史料群は、幕末から明治初期にかけての嘉穂・穂波両郡に関する庄屋文書や、明治期以降も、石炭産業のみならず、麻生家の関わった鉄道、銀行、電力、築港などの多様な史料、さらには貴衆両院議員を務めた麻生太吉の政治活動に関わる膨大な書簡などから構成されています。



【写真1】「麻生太吉日記」1925年4月3日

「午前安川氏ヲ松本別荘ニ訪問、貴族院議員ノ件ニ付内談アリタリ、事情ヲ陳シ辞退ノ申入ナシタリ」と、この日、安川敬一郎と会った麻生太吉は、この年6月に改選が行われる貴族院議員(多額納税者議員)への出馬を辞退し、2期14年間務めた貴族院議員を辞職する意思を告げました。



【写真2】「麻生家文書」書簡箱内

飯塚市栢の森にあった麻生家の米蔵に保管されていた「麻生家文書」の調査は1974年から始まり、1979年、石炭産業史に関する史料の収集・調査・研究を目的とした九州大学石炭研究資料センターが設立されると、そこに史料が移管されました。これらの史料は順次整理が進められ、『九州石炭産業史資料目録』第1巻～第11巻に目録が掲載されています。

その後、1990年には、麻生セメント株式会社から麻生商店・関連会社の洋式会計帳簿をはじめとする新たな史料を受け入れることとなりました。大量の帳簿は、戦前分については私家版の仮目録(『麻生セメント株式会社資料目録』)が作成され、公開されています。

その後も、「麻生家文書」は、石炭研究資料センターにおいて整理が続けられ、カード目録の作成(記録資料館閲覧室で検索可能)や部分的な目録の公刊、『麻生太吉日記』全5巻の出版など、調査・研究の実績を積み上げてきました。そして、これまでの取り組みを加速・拡大し、目録データベースの完成・公開、他分野の研究への



【写真3】記録資料館備付カード目録

活用を目指すため、株式会社麻生からの寄附金のもと、2020年8月に記録資料館の5つ目の部門として本部門が新設され、9月、原口大輔が特任講師として着任しました。設置期間は2020年度から2029年度までの10年間で予定しています。

さて、本部門は、「麻生家文書」に関する次の三点を中心とした活動を進めていきます。

#### (1)「麻生家文書」目録データベースの公開・充実による研究基盤の創出

目録データベースの公開、重要史料の電子化公開により、これまでの制約を打破する研究基盤を創出していきます。

#### (2)「麻生家文書」を核とする石炭産業をめぐる包括的研究の推進

日本の産業化・近代化をもたらした石炭産業を、政治・社会・文化など包括的な視点でとらえ直す研究拠点を形成し、学内外の研究者・研究グループとの共同研究を推進していきます。

#### (3)研究成果の発信

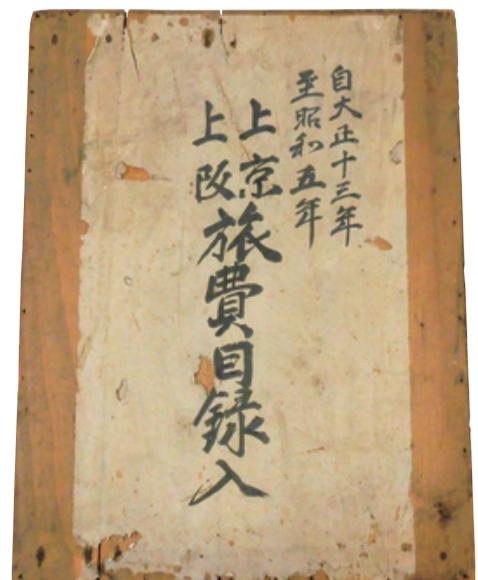
多様な研究成果は、九州大学学術情報リポジトリによりインターネットでも広くアクセスを可能とし、さらなる研究の促進につなげていきます。加えて、シンポジウム、展示など、地域社会や市民の関心に応える発信にも積極的に取り組んでいきます。

## 麻生家文書の分類名と史料構造

段階的な受け入れと、長期にわたる整理状況を踏まえますと、麻生家文書の分類は大きくa～gに整理することができます(【表】)。これらの分類名は原史料を収納していた外容器(箱など)を対象に付されているものと(a～c、f、g)と、組織と編年を基準に与えられたものがあります(d、e)。以下、古賀康士氏の整理をもとに、簡単に説明していきます。なお、整理状況とは、2021年1月末時点での情報となります。

#### (a)外容器分類

原史料が収納された外容器の箱書きなどに基づいて、箱別に1、2文字程度の識別記号を与えたものとなります。記号の付与方法につい



【写真4】外容器

ては、箱書の冒頭の一字を用いたものや、「M21」などの年次、箱内の史料の特徴や箱の外観によるものもみられます。

#### (b)五十音分類

原史料が収納された箱別に五十音(あ～わ)の1文字の記号を付したものです。適当な箱書きがないなど外容器分類による識別記号の付与が難しい時に使われたものと推測されています。ただし、五十音分類は付与できる記号数が50に限られるため、「わ」を最後に使用されなくなりました。

#### (c)千字文分類

原史料が収納された箱別に「千字文」から漢字1字を選び、識別記号として付与したものです。「千字文」は中国などで使用される初学者用の教科書で、「天地玄黄」から始まる千字の漢字からなる韻文です。千字文分類は五十音分類の後に採用され、可能な限り価値中立的な記号の使用を目指した結果であったとされています。しかし、この千字文のなかには現代日本人にとって難解な漢字があり、識別記号として不適当なことが少なからずあったため、使用された識別番号は70ほどにとどまることになりました。

#### (d)関係会社別分類

1990年に麻生セメント株式会社からの受け入れた史料のうち、洋式会計帳簿に対して用いられた分類方法です。帳簿を作成した組織別に、帳簿の性格を踏まえた上で、年次別に整理番号が付けられました。

#### (e)書簡編年分類

書簡類を編年で分類し、年次別にまとめたものです。例外として、書簡の発信地別にまとめた「書簡県内」・「書簡県外」の識別番号もあります。明治後半から昭和初期まで続いており、一年あたりの書簡が1000通を超える年も少なくありません。

#### (f)未整理ラベル分類

「未整理」の箱ラベルが付された分類になります。「未整理」として1～251までのナンバーリングがなされています。貴族院関係史料の一部はすでに目録化されています。

#### (g)無ラベル分類

箱にラベルが添付されていない約160箱の史料の一群です。未整理ラベル分類とあわせて、箱の識別記号をどのように付与するか検討中です。

以上の分類を一覧にまとめると表のようになります。「麻生家文書」は国内に所蔵される私文書として最大級のものと考えられます。前述のように、これらの史料の一部については適宜目録が作成、公開されてきましたが、未整理の史料が相当数残っています。そして、e書簡編年分類を筆頭に、当館所蔵のカード目録でしか検索することができない史料も多く、膨大な史料群を活用するための整備が何より必要不可欠なところです。本部門では、長期的な計画と皆さまからのご支援のもと、未整理史料の目録作成に加え、これまで作成されてきた目録を段階的にまとめ、電子化公開を行い、「麻生家文書」を核とした研究を推進していきます。

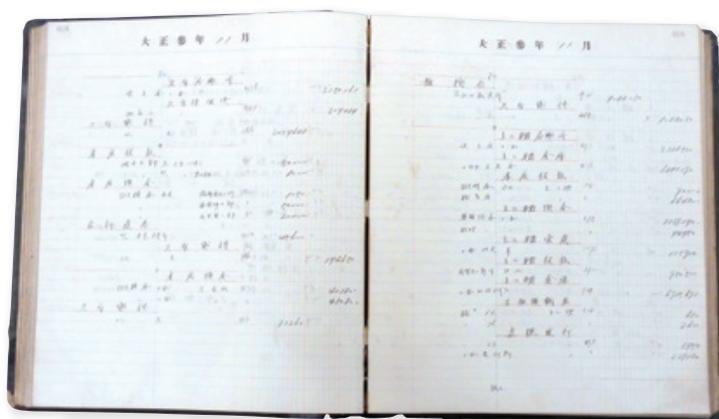
【表】「麻生家文書」の分類と整理状況(2021年1月末時点)

分類名	摘要	採録状況	検索手段
a: 外容器分類	「藤」など箱書の一部文字から命名	一部整理済	『九州石炭鉱業史資料目録』第1～11巻
b: 五十音分類	「あ」～「わ」	一部整理済	『九州石炭鉱業史資料目録』第1～11巻、カード
c: 千字文分類	「千字文」に由来(「天地玄黄・宇宙洪荒…」)	一部整理済	カード
d: 関係会社別分類	麻生商店など各社洋式帳簿	整理済	麻生セメント株式会社資料目録(私家版)
e: 書簡編年分類	書簡M33～S8、書簡県内・書簡県外	一部整理済	カード
f: 未整理ラベル分類	「未整理」箱ラベル付	一部整理済	『石炭研究資料叢書』第37、38輯、「概要目録」
g: 無ラベル分類	無ラベルの未整理資料	未整理	「概要目録」

注1:『九州石炭鉱業史資料目録』第1巻～第11巻所収「麻生家文書」目録、『石炭研究資料叢書』第37、38輯所収「麻生家文書」目録は、九大リポジトリでも公開している。

注2:カードとは、記録資料館閲覧室に備え付けられているカード目録のこと。

注3:「概要目録」とは、日比野利信『近代日本における企業家のネットワーク形成』(平成28年度～平成30年度科学研究費助成事業研究成果報告書、2019年)巻末に付された「麻生家文書(未整理分)概要調査目録」のこと。



【写真5】洋式会計帳簿 大正三年下半期



【写真6】明治34年各坑役員関係書類綴

【主な参考文献】

秀村選三「麻生家の古文書」(麻生百年史編纂委員会編『麻生百年史』麻生セメント株式会社、1975年)

新鞍拓生『筑豊鉱業主麻生太吉の企業家史』(裏山書房、2010年)

古賀康士「麻生家文書の史料論的考察 ―大規模史料群の調査のために―」(日比野利信『近代日本における企業家のネットワーク形成 ―地方財閥の人脈に関する総合的研究―』平成28年度～平成30年度科学研究費助成事業研究成果報告書、2019年)

原口大輔(麻生家文書研究部門)

# 資料研究 北海道炭礦汽船株式会社幌内鉱業所旧蔵資料の紹介

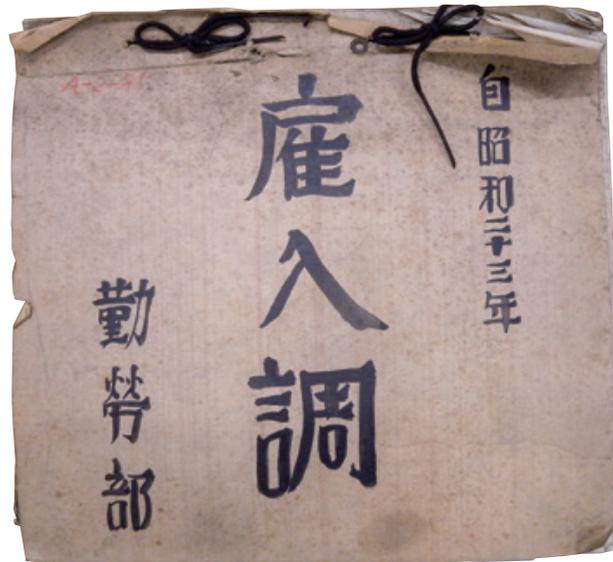
今回は、2020年に、記録資料館産業経済資料部門に北海道三笠市より寄託された、北海道炭礦汽船株式会社(以下、北炭と略称)幌内鉱業所旧蔵資料について紹介します。

幌内炭鉱は、1879(明治12)年、北海道開拓使によって開坑されました。1889(明治22)年に、同炭鉱、および付設の鉄道が堀基らに払下げられたことにより、北海道炭礦鉄道株式会社が設立されました(その後、鉄道国有化にともなって鉄道事業が政府に引き継がれ、北海道炭礦汽船株式会社と改称)。同社は創立以来、常に北海道では最大の炭鉱企業であり、日本全体でも三井鉱山株式会社、三菱鉱業株式会社に次ぐ位置にありました。第二次世界大戦後も長く採炭を継続しましたが、1989(平成元)年に幌内炭鉱が閉山し、さらに1995(平成7)年に空知炭鉱も閉山したことで、国内全炭鉱の生産を終えています(ただし、閉山時までには両鉱とも別会社による経営に移行しています。北炭そのものは、現在も存続しています)。

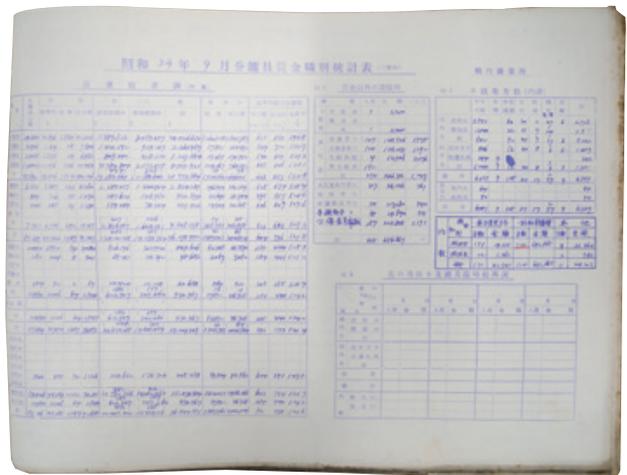
以上をみても一目瞭然であるように、北炭幌内炭鉱は、開坑から閉山まで110年という非常に長い歴史がある、希有な存在です。当然ながら、その旧蔵資料は非常に高い価値を有しています。この資料が、当資料館に寄託されるまでの経緯についてふれておきましょう。幌内炭鉱の閉山直後、三笠市に、幌内鉱業所旧蔵資料が寄贈されました。数次にわたって保管場所が変更された後、旧幾春別小学校に保管されることとなりました。閉山から30年を経た2019(令和元)年、三笠市より、本資料の寄託について当資料館に打診があり、翌20(令和2)年に正式に寄託契約が締結されました。そして、同年11月には資料の搬出入作業が実施されています。上記の通り、必ずしも良好な保存状況にあったわけではないため、幾度かの水損を被っており、虫害の問題もあります。このため、現在(2021年2月時点)では整理の傍らで、水損資料のレスキュー、資料の燻蒸などを実施しています。資料の閲覧利用開始までには、相当な時間を要することが予想されます。



(写真1)



(写真2)



(写真3)『昭和二十九年上期 職員賃金職別統計表』

資料の分量は、838箱に及んでいます(写真1)。残念ながら、戦前期(とりわけ創業期である明治期)の資料については少数であるものの、戦後復興期～高度成長期(石炭産業にとっては斜陽期)における鉱業所、すなわち現場の生産管理・労務管理に関する大変貴重な資料が多く含まれています。その一例として、勤勞部の「雇入調」が挙げられます(写真2)。この資料により、どのような地域の、どのような前職に就いていた人々が、炭鉱労働者として雇い入れられたのかを考察することが可能となります。これまで、戦前期についてはこうした分析がなされてきたものの、戦後期については多く明らかにされていません。戦後復興期には、非常に多くの労働力が投入されることで短期間の増産が達成されていますが、それを担ったのがどういった人々であったのかを明確にできれば、当該期の炭鉱像が更新されていくこととなるかもしれません。他にも、同様の可能性を秘める資料が多数存在しています(写真3)。

北炭資料に関しては、三井文庫・北海道博物館・北海道大学附属図書館の保管資料(いずれも北炭所蔵)、慶應義塾図書館所蔵資料が、既に整理・公開されています。今回、新たに鉱業所レベルの資料が大量に付け加わることにより、とりわけ戦後石炭産業史の研究については、さらに議論が活発になることが期待されます。

北澤 満(経済学研究院)

# 資料紹介 古野家文書の来歴と『古野家寄贈図書目録』

## 1. 『古野家寄贈図書目録』

九州大学附属図書館ホームページの所蔵コレクション「古野家旧蔵本」で公開されている『古野家寄贈図書目録』※1は、昭和19年頃、九州帝国大学附属図書館で作成されたものと考えられます。

同目録は、古野家の旧蔵本176部764冊を、図書館(16部68冊)、法科(47部80冊)、支那哲学(15部32冊)、国史(42部341冊)、東洋史(1部1冊)、国文(30部169冊)、支那文学(13部54冊)、経済(12部19冊)に分類しています(図版1)。法科に最も多くの部数が分類され、次に国史となっています。法科以下の分類は、当時法文学部に置かれていた学科および講座ごとに同家旧蔵本を分けたものと思われる。

受け入れ時のこうした分類法に因るものなのでしょうか、今日、古野家旧蔵本は、附属図書館の一般書架のほか、準貴重書室および記録資料館に分蔵されています。そのため、利用に際しては、九大コレクション※2や、「法制史料」※3、中央図書館に置いてある目録カードなどを駆使して、書名を検索する必要があります。

漢籍や様々な和書からなる古野家旧蔵本には、板本だけでなく写本も数多く含まれています。板本のなかには、「古野惣五郎威連蔵本」(『君子訓』)のように所蔵者が記されているものがあります。写本には、たとえば、「于時嘉永六癸丑八月十日書之終 古野三郎右衛門書」(『明君政事談 全』)のごとく、いつ、誰が書写したものであるのかを明記したものがあつて(図版2)。また、蔵書印が押された書物もあつて(図版3)。

以下では所蔵者名や筆写者を手がかりに、古野家旧蔵本の由来について考えていきます。

記録資料館九州文化史資料部門が所蔵する古野家文書に注目してみましょう。古野家文書とは、筑前国福岡藩領鞍手郡四郎丸村を居村として酒造業などを営み、近世後期には同村をはじめ近隣の村の庄屋役等を勤めた古野家に伝来した古文書群です。同家の文書目録は、『九州文化史研究所所蔵古文書目録 15』(九州大学九州文化史研究施設、1985年)として公開されています。

古野家文書3214『鞍手郡宮田触村役人印鑑帳』によれば、古野三郎右衛門なる人物が、文化8年(1811)から天保9年(1838)まで居村四郎丸村の庄屋を勤め、同年6月から弘化3年(1846)5月まで倉久村庄屋を、さらにその後は嘉永元年(1848)の時点で宮田村大庄屋を勤めていました。さきにみた古野家旧蔵本の『明君政事談 全』を嘉永6年(1853)年に写した古野三郎右衛門は、古野家文書に出てくる古野三郎右衛門と同一人物である可能性が高いといえるでしょう。図版3にあつた蔵書印と同じ印面が、古野家文書にも押されていることを確認できることから、古野家旧蔵本は、庄屋を勤めた鞍手郡四郎丸村古野家の蔵書であつたことが明らかです。「神川屋」は古野家の屋号です。

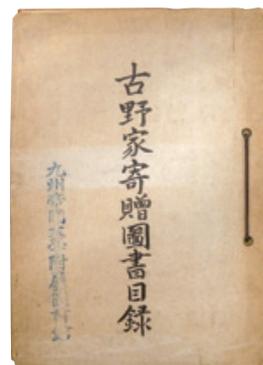
さらに、古野家文書の嘉永3年(1850)や明治元年(1868)の願書(2369・714)には、「四郎丸村庄屋古野惣五郎」の名前を見出すことができ、これは、古野家旧蔵本の「古野惣五郎威連」との関連性をうかがわせます。「威連」については、慶応3年の記録(古野家文書718)に「古野三郎威連」と記されたものがあります。

古野家では、明治期の当主も惣五郎と名乗り、戸長や鞍手郡全町村組合会議員、鞍手郡郡会役員などの公職を歴任しています(『鞍手郡誌』鞍手郡教育会、1934年)。

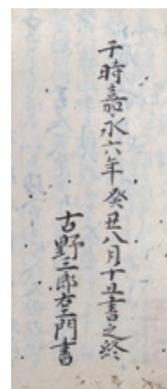
## 2. 古野家文書の来歴－遠藤正男と古野家文書－

古野家旧蔵本は鞍手郡四郎丸村古野家の蔵書であることが明らかとなりました。このことは、古野家旧蔵本が、九州文化史資料部門に所蔵されている古野家文書と、本来は一体のものであつたことを示しています。

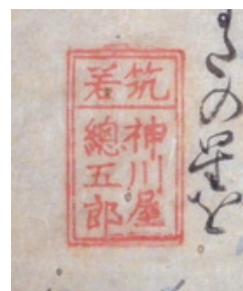
それでは、古野家旧蔵本は、いつ、どのようにして古野家文書から分離して、昭和19年頃に「古野家寄贈図書目録」が作成されるに至つたのでしょうか。つぎに、こうした問題を古野家文書の来歴という観点から考えてみたいと思います。



(図版1)



(図版2)



(図版3)

先ず、鞍手郡四郎丸村の古野家文書は、いつ、どのようにして、九州帝国大学に入ったのでしょうか。前出の『九州文化史研究所所蔵古文書目録 15』の凡例によれば、昭和8年(1933)に寄贈をうけたと記されていますが、寄贈の経緯については必ずしも明らかではありません。

そこで、当時、古野家文書の研究を行っていた遠藤正男に注目してみます。日本経済史を志し、昭和4年(1929)に九州帝国大学大学院に進んだ遠藤は、「福岡藩の財政金融史の研究」に取り組み、翌昭和5年に法文学部副手を嘱託され、翌々昭和6年に、最初の論文「秋月札の福岡領内流入に就て」を『経済史研究』18(1931)に発表します。同論文の註のなかで「四郎丸村の文書を見るに」とあり、この時点で古野家文書を見ていた可能性が高いのですが、当論文ではあくまでも古野家文書を参照していたにすぎません。古野家文書を論旨に組み込んだ遠藤の最初の研究成果は、翌昭和7年に発表された「旧福岡藩の藩債」(『経済史研究』33、1932年)です。当論文で遠藤は古野家文書の借用証文を一覧して、近世後期福岡藩の増税策を論じています。

その後、遠藤は、福岡の石炭産業史と、天領日田の金融史「日田金」研究へ傾注していきますが、彼にとって、古野家文書は研究を展開していく上で不可欠な史料となりました(「徳川後期筑前に於ける石炭産業の発展(上)・(下)」『社会経済史学』3-2・3、1993年。「日田金」の研究(一)・(二)」『経済学研究』4(2)・(3)、九州帝国大学、1934年)。

話を古野家文書の来歴に戻します。一連の遠藤の研究のなかで、古野家文書が「九大蔵」と明記されているのは、昭和9年の「日田金」の研究(一)です。同じく昭和9年の4月に刊行された『九州大学新聞』106号所収の「日田金」に関する文献並に資料」において遠藤は、「九大所蔵の古野家文書」と紹介しています。なお、昭和11年3月に発表された「筑豊石炭業に於ける初期会社企業」(『経済学研究』6(1)、九州帝国大学、1936年)では「古野家文書(九大経済研究室蔵)」と表記されています。

古野家文書は、昭和6年頃には遠藤が研究に参照し、昭和8年から同9年頃までに九大所蔵となり、昭和11年の時点では経済研究室が所蔵していたこととなります。経済学部の50年史「宮崎松原の青春」(九州大学経済学部五十周年記念事業会、1978年)によれば、昭和9年の九州文化史研究所開設にあたり、「当時遠藤が研究を続け経済史研究室に寄贈されていた千原、楠野、古野各文書を研究所に提供し、初期の所蔵文書の基盤をつくった」(485頁)と記されています。以上の情報を総合してみると、法文学部内に九州文化史研究所が開設されて以降、古野家文書が経済史研究室から九州文化史研究所へ提供されたと理解することができそうです。

昭和14年2月に刊行された「九州文化史研究所所蔵史料目録」(『法文論叢』26号、九州帝国大学法文学部学芸部、1939年)には「筑前國鞍手郡四郎丸村庄屋古野家諸記録 享和-明治(数量調査未了)原本」と記載されており、この時点においても古野家文書は未整理の状態でした。

昭和11年10月に助教授となった遠藤でしたが、昭和13年4月頃より体調を崩し、その後病床に臥し、昭和15年5月26日に病没します(享年40)(三田村一郎「遠藤正男助教授を憶ふ」『社会経済史学』10-5、1940年)。遠藤が亡くなって四ヶ月後の、昭和15年9月26日、九州文化史研究所『日誌』によると、「古野家蔵書(写本ノ部)目録作成」がおこなわれています。未整理のままになっていた古野家文書のうち、蔵書の目録が作成されたようです。

この時に作成された目録は未見のため、確証を得ることはできませんが、恐らく、昭和19年の『古野家寄贈図書目録』は、九州文化史研究所が昭和15年に作成した古野家蔵書目録を基にして、作成されたものとみることができそうです。

古野家文書は、1930年代に遠藤正男によって見いだされたものでした。同家文書を用いた遠藤の研究は、福岡藩の経済制度や、本格的な日田金研究の嚆矢として、今なお研究上の意義を有しています。

小稿において紹介した『古野家寄贈図書目録』は、今日、図書館各所に分蔵されている古野家旧蔵本が、かつて遠藤によって研究に用いられ、九州文化史研究所に保管されて来た旧鞍手郡四郎丸村古野家文書に由来するものであることを知る事ができるたいへん貴重な目録なのです。

梶嶋 政司(九州文化史資料部門)

※1 <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/furuno>

※2 <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja>

※3 <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/collections/hosei>

## 北炭資料の搬出入と各種対応

北海道炭礦汽船株式会社寄託資料(以下、北炭資料)の搬出入と各種対応について説明します。北炭資料は、三笠市に寄贈されてから、保存場所を転々とし、搬出直前には、旧幾春別小学校にありました。3年前には、この旧幾春別小学校において、雪解け水による水損被害を被っています。

北炭資料の整理を円滑に進めるため、2020(令和2)年8月下旬に旧幾春別小学校を訪れ、838箱のラベリング作業を行いました。諸般の事情から、搬出は当初計画よりも遅滞しましたが、同年11月9日、12～13日にかけて行われました。搬出作業の初日である9日には、作業現場である音楽室の天井から雨漏りが発生し、資料に水損被害が生じました。北炭資料を別置すると同時に、水損資料については、箱の入れ替えなどの応急処置を施しました。13日の搬出作業の終了後にも、雪解け水による雨漏りが発生しています。搬出作業が、もう1週遅ければ、大部分の資料が水損する事態も予想されました。その意味では、不幸中の幸いであったと安堵しています(安全な場所に資料を移動していただいた、三笠市立博物館のスタッフの皆さんに厚く御礼申し上げます)。

北炭資料の輸送には、貨物コンテナ便が用いられ、福岡県に運搬された後、殺虫・殺カビのために燻蒸が行われました。その後、同月16日、24日の2回にかけて、記録資料館に搬入されました。図1は、水損資料の一例です。水損資料には、インクが滲んだものや、貼りつきが生じたものなど、その被害状況も一概ではありません。加えて、虫害のほか、カビやほこりの付着があることから、これらの対応と並行して資料整理を進めています(図2)。水損資料などの対応が必要なことから、九州北部豪雨災害など、水損資料のレスキューに豊富な実績のある九州歴史資料館で、水損資料のレスキュー方法のレクチャーを受けました。このような水損への対応は、これまで、おもに各種資料の受入や保存などの役割を担ってきた記録資料館にとって新しい試みです。膨大な資料群の整理に加えて、水損などの各種対応が必要なため、北炭資料の公開には、しばらく時間を要することが予想されます。

平 将志(産業経済資料部門)

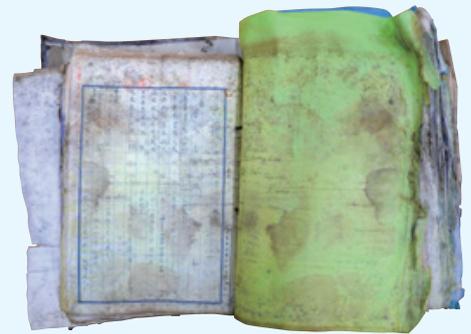
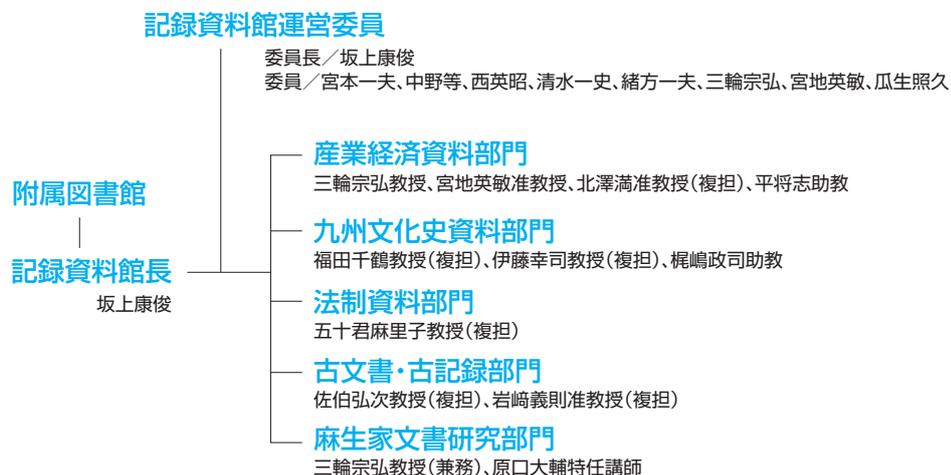


図1



図2

## 令和2年度記録資料館組織(令和2年9月1日現在)



# 刊行物紹介

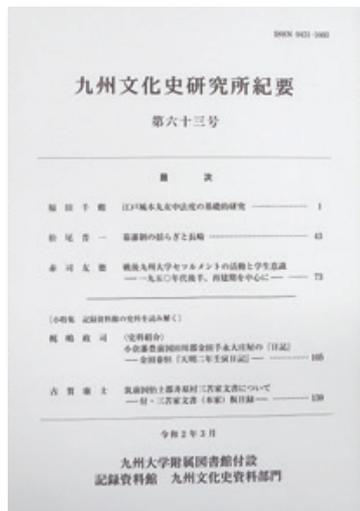
## 産業経済資料部門

2020年は、『エネルギー史研究』第35号を刊行し、論説1本、資料紹介5本、書評2本を掲載しました。

論説では、都留慎司が、両大戦間期における石灰石需要の動向について、とくに北部九州地域の特性に注目し、九州産業鉄道の石灰石販売を事例として検討しています。

資料紹介では、まず、池上重康が、『山野礦業所沿革史』を基礎資料として、三井鉱山株式会社山野鉱業所の従業員社宅と職員社宅について、間取りと仕様の変遷を中心として考察をしています。つぎに、秀村選三が、第33号、第34号に引き続いて『内政部長事務引継書』を紹介し、本号では、厚生課と民生課について論じています。さらに三輪宗弘は、国立国会図書館憲政資料室所蔵の『A級裁判参考資料 永野被告関係』から『永野修身元帥手記(東京裁判関係資料)』などと、『石炭情報』(日本石炭協会編、昭和24年)の付録である『炭鑛災害統計表』を紹介しています。最後に、古賀康士が、唐津藩の大庄屋である諸岡家の由来史料のうち、産業経済資料部門所蔵分について纏めています。

最後に、書評として、北澤満が、藤野豊『「黒い羽根」の戦後史—炭鉱合理化対策と失業問題』を、宮地英敏が、宮島清一『時代を拓いた唐津の先人』を、それぞれ取り上げて論評を加えています。なお、『石炭研究資料叢書』は、今年から不定期刊行となったことを、申し添えます。



## 九州文化史資料部門

『九州文化史研究所紀要』第63号は、論考3本と、「小特集 記録資料館の史料を読み解く」を企画し、同館が所蔵する史料の紹介をおこないました。

論考としてまず、福田千鶴「江戸城本丸女中法度の基礎的研究」は、江戸城本丸の奥向奥方へ奉公する女中に関する女中法度を通時的に読み解き、その特質を探ったものです。松尾晋一「幕藩制の揺らぎと長崎」は、文久年間を幕末政治史の重要な画期ととらえ、変容する政治外交史のなかで長崎を捉え直すことが試みられています。近代日本の大学制度と地域社会との関係は大学史にとって重要なテーマと思われませんが、赤司友徳「戦後九州大学セツルメントの活動と学生意識—一九五〇年代後半、再建期を中心に—」では、戦後における九州大学セツルメントの活動を紹介しています。

記録資料館には、17世紀から20世紀日本における、地域の社会経済生活に関する膨大な歴史的資料が収集保管されています。本小特集では、梶嶋政司「小倉藩豊前国田川郡金田手永大庄屋の『日記』—金田泰恒『天明二年壬寅日記』—」が、小倉藩大庄屋の日記について紹介しています。古賀康士「筑前国怡土郡井原村三苦家文書について—付・三苦家文書(本家)仮目録—」は、福岡藩の大庄屋家文書の紹介です。この小さな企画が、当該地域社会研究推進の一助となれば幸いです。

# 令和2年活動記録

1月10日	第40回記録資料館運営委員会
1月18日	中津市歴史博物館「時代を啓く、時代を作る」展(～3月1日)に三奈木黒田家文書を貸出(文化史)
2月6日	南島原市口之津図書館「碑に刻むー供養される靈魂たちー」展(～3月1日)に古賀文庫を貸出(文化史)
3月25日	『エネルギー史研究』35号(産経)
3月27日	第41回記録資料館運営委員会
3月30日	『記録資料館ニュースレター』14号発行
3月30日	『九州文化史研究所紀要』63号発行(文化史)
3月31日	古賀康士助教退職(産経)
6月17日	第42回記録資料館運営委員会
8月1日	平将志助教着任(産経)
8月1日	麻生家文書研究部門設置
9月1日	原口大輔特任講師着任(麻生家文書研究部門)
9月4日	六角家文書ワークショップ(文化史)
11月16日・24日	北海道炭礦汽船株式会社関係資料(三笠市寄託契約)受入(産経)
12月22日	第43回記録資料館運営委員会

## 編集後記

記録資料館ニュースレターの第15号をお届けします。本年度は、新型コロナウイルスの影響により、記録資料館の活動も長期間の自粛を余儀なくされ、利用者の皆様にはご不便をおかけしております。一日も早く、通常の活動が再開できることを願っています。

さて、本号では、昨年8月に新設された麻生家文書研究部門の活動を特集しています。同部門では、今後10年間をかけて、麻生家文書の調査研究をすすめ、その研究成果をひろく社会へ発信していくことを使命としています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

### 九州大学附属図書館付設記録資料館 ニュースレター Vol.15

編集発行：九州大学附属図書館付設記録資料館

〒819-0395 福岡市西区元岡744

発行日：2021年3月

E-mail miwa.munehiro.535@m.kyushu-u.ac.jp(産業経済資料部門)

miyachi.hidetoshi.099@m.kyushu-u.ac.jp(産業経済資料部門)

bunka@lit.kyushu-u.ac.jp(九州文化史資料部門)

<http://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/libraries/manuscript>